

2020年4月26日 司祭 越山 哲也

八戸聖ルカ教会

## 復活節第3主日 メッセージ

福音書 ルカによる福音書24章13節～35節

主の平和が皆さんと共にありますように

新型コロナウイルス感染症蔓延防止対策のため、東北教区の全教会での主日礼拝及び諸集会に関して一堂に会して行うことが休止されて1ヶ月が過ぎました。最後に主日礼拝を皆さんでお献げしたのが3月22日でした。当時、教会暦は大斎節からイエス様の受難を覚える最も大切な時である聖週、そして復活日を迎える時であり、礼拝を皆さんと出来なかったことはやはりとても寂しいことでした。

一堂に集まったの礼拝が休止されてからは、聖ルカ教会では毎主日午前10時半から私と妻、そして二人の子ども4人で礼拝を献げております。再び皆さんとまた一緒に礼拝が献げられる日が来ることを願っています。今は「離れることによりつながる」という逆説的な言い方ですが、現状を耐え忍びながら想像力を失わないで皆さんと直接お会い出来なくてもイエス様によってつながっていることを心に深く留め続けて参りたいと思います。

先週4月24日(木)の朝日新聞に「未来 夢見るより作ろう」という記事が掲載されました。執筆者は、渡辺憲司さんで現在は自由学園最高学部学長で、過去には聖公会の立教新座中学校長をされ、2011年の東日本大震災によって卒業式が中止になったときに卒業生に向けて「時に海を見よ」とメッセージを送ったことが大きな感動と反響を呼びました。渡辺氏が寄稿された記事の中にこんな一文がありました。

「(新型コロナ)ウイルスは肉体を、むしろむだけではない。精神や心をも侵してゆく。不安は、始まりに過ぎない。やがてそれは他者への攻撃に向かう。そして差別や偏見に。それだけではない。自己の誇りや人間性も奪っていく。だからこそ、やさしさが必要だ。目の前の人にやさしさを向けよ。」

まさに、現状からそしてこれから起こって行くであろう事への警告だと思いました。それに立ち向かうためには「やさしさ」が必要であると渡辺氏は言っています。私もそう思いました。

やさしさを人への思い、態度において示していかなければ私たちの心はどんどん蝕まれていってしまうと思います。イエス様が教えられた最も大切な教えは「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」です。「自分を愛するように」とは、自分自身を良く知るといっても考えることが出来ると私は思います。

そして人は誰もがアダムの罪、つまりあの天地創造の時にアダムとエバが禁じられていた命の木の果実を食べた時から、神に背く性質、自分が一番という罪を抱えて人は生まれ、それは生きている限りぬぐわれることはないのです。

それを「原罪」と言います。悪魔の誘惑は人をこの原罪に隙あらば引き込もうと虎視眈々と狙っているのです。私たちはこの原罪をいつも抱えていることを忘れてはいけません。そしてこれを克服すること

は残念ながら私たちには出来ません。これを可能にすることが出来るのがイエス様の十字架の死、そして復活なのです。だからこそ、私たちの信仰、教会の信仰はイエス様の復活に根源を持つのです。

聖パウロがコリントの信徒への手紙Ⅰ 第15章14節で次のようにはっきりと言っています。「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」

自分が大切でいいのです。ただし、それは隣人との関係性と切り離してはいけません。

そしてそれをつなぐのがやさしさであり、そのやさしさの中に生きるためにはイエス様の愛を忘れてはいけません。

本日復活節第3主日の福音書は、ルカによる福音書24章13節～35節です。どうぞ皆さんそれぞれじっくり味わってお読みください。

主イエスの十字架の死という大きな悲しみにくれて失意の内にエマオという村へ向かって歩いていた二人の弟子のもとへイエス様が自身が近づいてきました。しかし、二人はまだその方がイエスだとは気づきません。悲しみと失意という現実のうちめされているのです。

それでもなお、イエス様は二人と一緒に歩きます。すると次第に彼らの心に変化が現れます。そして、一緒に歩いてくださっていた方がイエスだと分かった時には主のお姿は見えなくなっていたのです。

二人の弟子は言います。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」

私は、この彼らの言葉に今思いを寄せたいのです。今、本当に不安な日々です。不安は始まりに過ぎないとも渡辺氏はおっしゃっているように、今まさに私たちはイエス様の教えに、そして聖書のみ言葉を心にしっかりと留めたいのです。私たちの信仰の灯火が消えないように、私たちの信仰の心が燃え続けるように、隣人との関係をやさしさの中でつないでいくことが出来るようにイエス様はエマオの道を二人の弟子たちと歩いて下さったように、私たちと今この時一緒に歩き続けてくださっていることを信じたいと思います。